

第13回(2017年) 日本藻類学会 研究奨励賞

【日本藻類学会 研究奨励賞 受賞記念特集】

2017年3月24日におこなわれた日本藻類学会総会にて、第13回(2017年)日本藻類学会研究奨励賞の発表と授与が行われた。同賞は藻類学及びその関連分野において優れた研究成果をあげた若手研究者を表彰するものであり、推薦委員会からの報告(推薦者と推薦理由)に基づいて、評議員会にて同賞の選考・決定が行われ、今回、木村圭氏(佐賀大学低平地沿岸海域研究センター)と山口晴代氏(国立環境研究所 生物・生態系環境研究センター)が受賞された。

第13回日本藻類学会研究奨励賞を受賞して

木村 圭

この度は第13回日本藻類学会奨励賞を賜り大変光栄に思います。これまでに指導を賜りました、甲南大学の本多大輔先生、北海道大学の木村泰三先生、高知大学の長崎慶三先生、瀬戸内海区水産研究所の外丸裕司博士はじめ、ご支援、ご講評を頂きました全ての皆さまに、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

私が藻類学と出会ったのは、甲南大学在学時の事でした。今から13年前、指導教員である本多先生から藻類の分類や培養の基礎を学び研究をスタートしました。今から思い起こせば、当時、本多先生の研究室を選んだのは、実習で様々な藻類、原生生物の透過型電子顕微鏡像を観察し、藻類細胞の複雑さ、その構造の多様さに感動したことがきっかけでした。そして学部4年生の時に、微細藻の鞭毛切断機構に関して初めて学会報告をしたのが、北海道大学で開催された日本藻類学会第28回大会でした。偶然なのか、人生初の学会発表となった第28回大会の大会会長であった本村先生に師事を仰ぐ為に、北海道大学室蘭臨海実験所で学び始めたのは、それから2年後の博士後期課程からでした。この期間では、褐藻のミトコンドリア細胞質遺伝機構について研究をしてきました。この研究を通して、電子顕微鏡観察だけでなく、様々な観察・解析に取り組んだことは、後の研究の方向性の決定や、研究実行力という面で大きな力になりました。そして何よりも、5年間にわたる臨海実験所での研究生生活は、他に経験できない貴重なものとなり、その後の私の研究姿勢の礎となりました。

博士学位を取得後は、水産研究・教育機構瀬戸内海区水産研究所のポスドクとして、藻類ウイルスの研究をスタートすることとなりました。ウイルスのことが全く分からない中、宿主の珪藻がウイルス感染による死滅の後に復活する現象を発見したのは、最初の珪藻-ウイルスの感染培養実験でした。この現象について、その面白さに共感し後押しをしてくださったのは、同研究所の外丸博士でした。その後、このウイルス抵抗・生残現象が、珪藻培養株に共存していたバクテリアによって誘導されることを突き止めたことで、珪藻ウイルス研究にのめり込むようになっていきました。同研究所では、現場の調査によって珪藻とウイルス種出現の関係を明らかにし、



奥田会長より賞状の授与

また培養実験からウイルスによって感染至適環境が異なることなどを突き止めるなど、珪藻ウイルスの生理生態学的関係について成果を積み上げてきました。佐賀大学に移ってから、珪藻ウイルス研究は、大きな研究テーマになっています。

これまでの研究経歴を思い返せば、ナノ〜ミクロの世界の研究からスタートし、今では沿岸海洋を考えるマクロな視点にまで発展できたのは、その都度「藻類」から面白い研究テーマを貰うことができたからかもしれません。藻類細胞の電子顕微鏡観察像に魅了されたことがきっかけで藻類学研究をスタートし、このような賞まで頂くことができ、面白さの詰まった「藻類」にも感謝しています。

研究を始めてから十数年の間の研究手法の進展や、藻類の注目度の変化はめざましく、研究の考え方も大きく変わってきたと感じます。それでも、室蘭臨海実験所で身につけた、ひたすら調査・実験をやり続ける研究姿勢で成果を挙げて来られたことを武器に、これからも精進していきたいと思っています。今回、藻類学会奨励賞という名誉ある賞を賜り、自分の研究テーマである「藻類とウイルスとの関係」の発展だけでなく、藻類学の発展に貢献できるような研究を続け、さらには藻類学を担う後進を育てる教育をしていきたいとの思いを強くしました。これからも日々研鑽に励んでいきたいと思っています。今度ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

(佐賀大学)

第13回日本藻類学会研究奨励賞を受賞して

山口 晴代

この度は第13回日本藻類学会研究奨励賞を賜り、大変光栄に存じます。このような名誉ある本賞が頂けましたのも、筑波大学・筑波大学大学院時代の指導教員である井上勲先生、現在の職場の国立環境研究所の上司である河地正伸先生をはじめ、共同研究者の先生方の御指導のおかげです。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

私が最初に日本藻類学会に参加したのは、2004年の札幌大会で、私はまだ大学2年生でした。雪の残る札幌の街を研究室の先輩の後ろについて参加した学会は、とても刺激的で今でもその時のことが思い出されます。私はその当時、不等毛藻の研究を行っていましたが、はじめての学会に参加して色々な講演を聴いてみると他の藻類の研究もとても魅力的に思えました。幸い、研究対象をひとつに選ばなくてもよいのが井上研究室の伝統であったため、藻類を研究対象にはしていましたが、その下位分類群についてはとくに定めずにさまざまな藻類を研究したい気持ちをそのまま持ち続け、実現させることができました。卒業研究では難培養性のラフィド藻の新種記載を神戸大学の村上明男先生との共同研究でおこない、修士課程では盗葉緑体をもつ渦鞭毛藻の新種記載と、北海道大学の堀口健雄先生との共同研究で別のラフィド藻の新種記載を行いました。また、博士課程では盗葉緑体をもつハ



国立環境研究所内の桜並木にて撮影

テナの共生藻の起源の研究を行うとともに、その共生藻の起源であるネフロセルミス藻の分類学的研究を琉球大学の須田彰一郎先生と行いました。大学・大学院生時代の研究フィールドはほとんどが和歌山でしたので、何度も何度もつくばから和歌山への日帰り採集をおこなった経験がいまの私の精神力の原点だと思っています。学位を取得してからは、現在の職場である国立環境研究所にて藻類のメタバーコーディングやアオコを形成するシアノバクテリアのゲノム解析に取り組んでいます。さまざまな分類群を対象に研究することは大変ではありますが、その大変さが逆に楽しくもあり、日々充実した気持ちで研究に取り組んでいます。また、さまざまな分類群を研究対象にすることで、必然的にさまざまな先生方から御指導いただく機会を頂戴しています。このような素晴らしい環境で研究ができることは本当に幸せなことだと感謝の気持ちでいっぱいです。

現在は、筑波大学の渡邊信先生が国立環境研究所にいらっしゃったときに創設された藻類カルチャーコレクションの運営にも携わる機会を頂いております。今後は私自身がやるべき研究を深化させるとともに、藻類カルチャーコレクションを通じて、藻類学の発展に微力ながら貢献していきたいと考えております。今後とも御指導、御鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

(国立環境研究所)



奥田会長より賞状の授与